

米軍基地文化を保存する営み

——埼玉県入間市「ジョンソンタウン」を事例として——

東京都市大学非常勤講師 塚田修一

1 目的

本報告の目的は、埼玉県入間市に所在する「ジョンソンタウン」を事例として、米軍基地文化の遺構を文化的に価値のあるものとして保存する意志について検討することである。

「ジョンソンタウン」とは、埼玉県狭山市に 1978 年まで所在していた在日米軍ジョンソン基地周辺の、米軍家族用の家屋、いわゆる「米軍ハウス」群の跡を住居用・店舗用として 2000 年代初頭より再整備し、統一された街並みを維持している区画である。

2 方法

報告者がこれまでに行ってきた、在日米軍ジョンソン基地周辺に 1970 年代前半に形成・展開された米軍基地文化に関する研究(塚田 2017)を踏まえた、史資料に基づくいわば通時的なアプローチと、フィールド調査に基づく共時的なアプローチの双方を組み合わせることによって、この「ジョンソンタウン」における米軍基地文化を保存する営みおよびその「まなざし」を立体的に把握し、考察していく。

3 結果・結論

この「ジョンソンタウン」の事例が興味深いのは、米軍基地文化の遺構や建築物に文化的価値を認め、それを保存しようとする事例自体、極めて稀である、ということに加え、それらに文化的価値を見出すような「まなざし」が、2000 年代以降——「後期近代」——になって登場していることである(実際、「ジョンソンタウン」は、2015 年に都市景観大賞、2017 年に日本建築学会賞を受賞している)。

さらに他の多くの文化遺産や歴史的環境のような、対象の文化財や建築物の現物をそのまま「保存」する(あるいはかつての理想的な形に「修復」する)という営み(だけ)ではなく、むしろ「ジョンソンタウン」においては、既存の建築物を改修・改変する、「再利用」(リノベーション)が行われている、ということである。

この「ジョンソンタウン」の考察を通して、本報告においては、これまでの文化遺産に関する社会的議論(例えば荻野編 2002 など)や歴史的環境の社会学における「保存」・「修復」と「再利用」の関係を改めて問い直し、ひいては「後期近代社会」における「保存の意志」や「保存のまなざし」を再考していく。

文献

荻野昌弘編、2002、『文化遺産の社会学』新曜社。

加藤耕一、2017、『時がつくる建築』東京大学出版会。

塚田修一、2017、「1970 年代の米軍基地文化に関する一考察——「狭山アメリカ村」を中心に——」『三田社会学』第 22 号。

森久聡、2016、『〈軀の浦〉の歴史保存とまちづくり』新曜社。